

日本の歯科の歴史を語る

(出席者) 山田平太
今田見
内田安
本邦
原三郎

(司会)

昭和47年4月6日・於原宿南国酒家

日本の歯科の確立前後

原 お忙しい中をありがとうございます。私ども、医家芸術クラブ、は医師、歯科医、薬剤師それに連なる方々を、正会員として、医人の、たんなる営業面ばかりでなく、その人の、治療者としてたずさわっている、人間の豊かさ、あるいは、患者に対する親切を忘れないというようなことで作られた会なんです。わりあい、歯科の方々は、こちらの手落ちで連絡が悪いんですが、会員が少なく、ぜひ、歯科の方にも一層のご理解

を得たいと考えます。

芸術という、なんか、キザに妙に解釈されますが、そういう意味でなく、医人は科学人であり、教養人であり、病人を相手にする。人生芸術人、であるという考え方であります。

それには、なんといっても、その面の歴史、文化というものが非常に注目されると思うんです。本日は、歯学における山田先生と今田先生は、そういう方面では最高峰だと思わんですが、若い方にも加わっていただきました。

今晚は、歯の特集、或いは歯科の特集というので、まあ、それに対する歴史、文化というのを中心としてご自由にお話をしていただきます。

私、歯科のことをほんとうに何も知らないんですが、便宜上、私が編集委員として進めますが、山田先生から歯学に関する発達、あるいは文化というものを話して聞きたいと思わんです。どうぞ。

山田 それでは最初に、医科と歯科とが別別になったか、なぜ、そうなったかということについて一言申しあげましょう。

ご承知のとおり、歯科は、医学の一分科―



歯の文字は口 初 と歯の形 鋸 と止から成り、止が音を表わす。もっとも古い字形は 註 と書く象形文字である。この歯に関する文字の寛政は山根哲哉（日本歯科大学医員）の筆になるものである。歯には年令に関する語

が多い。歯次（年令の順）、歯序（年令の順）歯杖（王宮から70歳の老人に賜る杖）、歯長（としより）、歯徳（年長で徳の高いこと）、歯常（としより）、歯賢（としより）などである。（解説 本間邦剛氏）

「医学のほうにも足を入れ、一方、工学のほうにも手を伸ばしているという恰好になっているわけですね。特に歯科のほうには、歯牙、顎骨欠損を補う、我々のほうから言いますと、補綴」と言うんですが、そういう作業がある。そのために医科と歯科とは別れなければならぬということなんです。この補綴がいわゆる歯科の特殊性とか特異性といわれているものなので、一般の医師は、歯科医業ができたのですが、しかし、医者でそういった補綴作業をする人は少なかったわけなんです。一方、歯科のほうから言いますと、

一方、歯科のほうから言いますと、医業のように一般のことをやる必要はない。その知識は局部だけやればいいんじゃないか。そして、その補綴ということをやるということで医科と離れて歯科が別個にできたというわけなんです。歯科医が、治療の間を軽視したような恰好になって、補綴のほうを重視した。ですから、ちよっと細工人のような感じでしたわけなんです。それで医者らしくなりたいたいという傾向になったのです。原 本式に歯科の専門家が来た、あるいはもっとむずかしく言えば、歯科の独立の根拠を作ったというのはいつ頃なんですか。山田 それは、日本に歯科学というものが、歯科学よりも、歯科医術のほうですが、数名のアメリカの歯科医が日本に来て開業している間に、日本人が、その先生の下で見よう見真似で覚えたというのが、日本に歯科医というものが出来た最初なんです。歯科医の公認は、エリオットという人につきまして横浜で勉強しました小幡英之助という人が、明治八年に歯科開業試験を願いだしたわけなんです。歯科の試験というのはその当時規則にはありませんから、いろいろ協議した結果一応、その当時の東大医科の先生が試験をし、そして合格をきめた。そこで、歯科医術開業免許状というものをもらった。これが、日本の歯科医のはじめなんです。そして、そういうふうな外国の歯科医が二年とか、三年、わずかの間、日本で開業しているときに、やはり日本人がその先生につきまして、歯科医術を習った。そして歯科医になり、その歯科医が弟子をとって養成をしてい



(今田 見信氏)



(本間 邦剛氏)

た。

それから、一方、外国に行きまして、最初

の目的を変更をして、アメリカで歯科医術を習って日本に帰って来た高山紀清という人が学校を創った。そして、だんだん歯科医が日本に出きたわけです。

原 今田先生は、明治初年というか、幕末前後というんですか、そのへんの研究をされて

いるということを知っていますか。今田 大体歯科というのは、明治以前は口

なることはできなかった。

口中医でも、入歯をこしらえる者もあったんですけども、やっぱり、主たる仕事は歯の治療、口中の治療でした。入歯師は簡易に

職札をもらって、口中の職域に喚込んで来たことだから、街の口中医は入歯も手がけて職

場を守ったもののように思います。明治になって小幡英之助にはじまった歯科

医の制度ができて、西洋流の歯科医が育って

いったというわけです。山田先生が言ったよ

うに、国で国家試験を制定したもんだから、

それを受けなければ歯科医にはなれないとい

うことで、入歯師のほうはだんだん自滅して

いったんです。だから、本質的にみると、歯科医師という

出席者紹介

- 山田 平次氏 明治二十八年生、東京歯科医
- 専、日本大学文学部卒、東京医科歯科大、
- 岩手医科大学非常勤講師、歯学史専攻。
- 今田 見信氏 明治三十年生、東京歯科医学
- 校検定合格、院歯部出版株式会社代表取締役
- 会長、社団法人自然科学書協合理事長、
- 歴史学会理事、歯学史研究会理事。
- 内田 俊信氏 大正十五年生、日本歯科大学
- 東京医科歯科大学卒、東京医科歯科大学口腔外科学
- 教室主任教授。
- 本間 邦剛氏 昭和七年生、日本歯科大学卒
- 日本歯科大学講師。
- 原 三郎氏 明治三十年生、東京医学専門学校
- 卒業、東京医科歯科大学名誉教授、日本医家芸
- 術クラブ編集委員。

のは口中医の真流であるとも言えますね。ち

ですがね。だんだんに社会の情勢に支配されて今にきていると思います。

小幡英之助と高山紀清

原 私たちは専門外なものですから、歯科医のことになると、やはり、高山紀清、それから小幡英之助という人程度は知っています。あの頃、慶応出たといえ、文化人の先頭ですから、そういう方が歯科に非常に興味を持たれたということはどういことなんでしょうか。

今田 たしかに歯科医師の第一号の小幡英之助は慶応で学んだ人です。高山紀清もそうです。二人とも武士ですから、慶應置県で失業した武家ですから、そういう文化的な仕



(山田 平太氏)

事にだんだん入っていったということではないでしょうか。

原 二人が、どういう方だったということに、非常に興味を持ったんです。

今田 小幡英之助は、中津藩の軍術の部類の家系なんです。そして、長州征伐にも参加しているレッキとした若い武士です。それで、慶應義塾の塾長だった小幡篤次郎は英之助の叔父さん分になるんですね。それを頼って上京し慶応に入ったわけです。

そして、慶応に入ってから、医者になるつもりで、佐野謙元の書生に入ってから医者のほうの勉強をしていたんです。

それからシモンズと関係の厚い近藤静平に師事し、そのうちに、近藤さんの兄さん(近



(内田 安信氏)

藤担平)が小幡英之助が非常に器用だということを見込んで、君は歯科医になったらどうかとすすめたんで近藤静平の紹介で横浜で開業していたネリオットに入門したんですね。

高山先生はアメリカ帰りの歯科医の第一号ですが、岡山県の人です。高山先生の家系を調べているんですが、まだはっきりわかりませんが、祖先の墓は岡山にあります。やっぱり慶応との関係は、はじめの頃塾長だった岡田振蔵が、福沢先生の推挙で岡山藩に出張教師に派遣されたときに藩から選ばれた一〇人の門下生の一人で、岡田振蔵が義塾に帰任する時に同伴して東京へ来て、岡田の世話で慶



(原 三郎氏)

応に入門しました。どのくらい在籍したかは判りません。とにかく英語を勉強して、結局アメリカへ行ったんです。

アメリカへ行つてサンフランシスコで働いているうちに、歯が痛くなって、治療にパンデンボルトという歯科医のところへ治療を受けているうちに弟子いりし、歯科医になってから日本に帰ってきたんです。

原 血腸守之助という人はどういふふうな方ですか。

今田 これはまた、高山先生のほうです。高山歯科学院に学生として入って卒業してから講師となり、後に高山歯科医学院を譲り受けて日本の歯科の基礎を築いた人です。新潟県の三条という所で、英語の先生でいるときに歯科医になることになったんです。

原 歯科医の開業試験の第一号は青山千代したわけ。

本間 山田先生どうですか。やはり、小幡英之助ですが、歯科医師の第一号は青山千代次でしょう。

世界の歯科技巧の歴史

原 私どもも医学史全体の中で、今言ったような先生方の名前はやっぱり、覚えていま

すが、全世界とか、日本の今の先生方より以前の人のいうと、どんな名前がわかりますか。

本間 例えば、歯科で何が特徴だということ。大体その、エボックのことだと思っただけです。そうすると、うんと古くはなくて最近ですと、大体、一六八四年頃のブルマンだと思っただけです。

というのは、技工に模範を応用したということ、ブルマンが考案するわけですが、そのこと、ブルマンが考案するわけですが、その頃ですね、山田先生、大体、日本の慶長元年が、万有引力の法則を発見していますから、一八世紀の始めにハイステルという人がいるんなこと書いておられますけれども、ハイステルという人は、いわゆるブリッチを作ったわけですね。

その次にいきますと、やっぱり、一八世紀の中間頃にムートンが、まあ、ゴールドクラウンを作るわけですね。ゴールドクラウンと、今のいわゆるワイヤーグラスを作るわけですね。

だんだん、そのようにして、外国で技術に開眼したいろいろな発明考案が行なわれたわけですが、なんといっても例のフォシャールですか、一八世紀の歯科界では、一ばん最高

峯とうたわれたわけですね。近代歯科学に業路を残すわけですね。

やはり、私は歯科技工を一ばん手っ取り早く、手っ取り早くと言つては語弊があるかもしれませんが、大きく飛躍させたものは、口の中の状態を、入歯を作るときに非常に便利にように、口の外に復元することが、私は一ばん問題じゃないかと思っただけです。そのためにも噛み合せの状態を作るように顎の関節の状態を復元するということが、咬合器の発明が、私はまず大きなものになるんじゃないかと思っただけです。

咬合器の発明は一九世紀の始めになります。文化二年に日本では華岡青洲が、例の全身麻酔をやるわけですねけれども、このときに同じ年代一八〇五年にフランスのガリオが咬合器を発明しているわけですね。これは同じ年代ですね。

そうしますと、そのあとには文政六年になります。例のシーボルトが長崎に来ておられますから、天保十年になりますとアメリカのバルチモアに歯科の教育施設ができるわけですね。大体こんなところが歯科技工に対する発明だと思っただけです。

外人歯科医とその弟子たち

原 外国から日本に対する歯科の輸入と、日本を中心として歯科の発達を……

本間 日本になりますと、やはり、近代歯科学が入ったというのは、例の万延元年ですか、イーストレイキがはじめて横浜に西洋医学の輸入、はじめての西洋歯科医学じやないかと思うんです。

イーストレイキが来られた、この頃から日本ではセメントが使われはじめるんですけどねえ。イーストレイキのほうは、今田先生が一



木製義歯の材料は黄楊(つげ)で、人工歯は硝子、象牙、獣骨、天然歯々冠などで完成させた。また義歯にはこのように漆を塗ってつよさをと、生臭いものがしみこまないなどの長所があった。(解説 本間邦則)

に伊沢道盛の養子になったために医者をやめて歯科に転向、アメリカとドイツに留学、帰朝して東大外来歯科の開設を助けた人です。

高山先生と小幡先生は対照的な存在ですよ。小幡先生は開業一方で大変流行したのに荒っぽく消費した人だが、よい弟子を沢山育てた。高山先生の事業には協力しない。高山さんは学校屋だといって殆ど帳中におかかったが、弟子はよく協力した。特に榎本實一などは血闘守之助と共力して日本の行政面に確固たる土台を築いたということも忘れてはならないと思います。

原 まあ、山田先生は歯の歴史、なんでも知ってるけれども、何よりも日本に歯学がよそから入ってきたところの関係をもう少しお伺いしたいんですが。

山田 それは、さき程申しあげましたように、アメリカの歯科医が来て、その連中はアメリカで、歯科が一ばん発達しかけた十八世紀の末から十九世紀の初め頃の新しい歯科医学を教わった連中なんです。

それを、日本にもって来て、日本人が習ったんだから、日本の歯科というのは、その当時の水準でもって発達したという点ですねえ。非常に苦勞なしにいったという点なんです。

ばんご研究になって……

今田 イーストレイキは一八六〇年(万延元年)に神奈川県に来ました。

彼が万延元年に来たときに、いったいどの程度の歯の治療をしたのかということは、あやしいんです。日本人はあのけわしい世相の中で、そこまでいって治療をしてもらおうと思っていないでしょうし、在留外人が治療を受けたでしょうが、それも、そうたくさんはあるはずがありません。

当時、外人は二〇〇人ぐらいしかいなかったですから、ちよつと荷を下した程度で、間もなく断念して支那へ行つたんだと思えます。

原 イーストレイキにつながる日本人の名前というは?

今田 一ばん無陶を受けたというのは長谷川保という人です。これは明治二年にイーストレイキが二回目に日本に来たときに、横浜で開業したから、最初に雇われて門下生になったのが長谷川保です。二ばんに佐藤重です。日本大学の歯科の設立者、佐藤運雄先生の養父です。

だから、イーストレイキの技術的な直系は、たしかに佐藤先生だったわけですが、し

すが、その点は恵まれていたわけですねえ。

東京歯科大学と日本歯科大学の創設

原 山田先生、歯科教育というのは、私らの目で見ると、非常に医学全体とは異なつてドイツ系ではなくてアメリカ系ですねえ。そうして高山さんと血闘さん、日本歯大の学祖中原市五郎さんというのが頭に浮ぶんです。

山田 先程もちよつと出しましたが、明治七年に医術開業試験規則が出まして、そこで歯科の試験と医科の試験と別々になりました。そして医科にはこれだけの試験科目をする。歯科にはこれだけの試験科目をするという

ことがはつきりし、開業試験を受けて合格しなければ新しく開業はできないということになったのですが、医科のほうは明治の方針のつとりまして、政府が力を入れて、いろいろな規則、制度をつくる、教育の機関も作るというふうな医師の養成ということに非常に努力したのですが、歯科のほうは種子扱いで、いっこうに試験規則を作っても、受験の準備をするような医育機関というものに

政府がタッチしない。そこで、民間のほうで試験を受けるために

かし、佐藤先生は本場のアメリカで仕込んできておりますから、直接影響は受けておられますね。イーストレイキの仕事のやり方は長谷川保並びに長谷川を介して佐藤重あたりだと思えます。

しかしイーストレイキは日本に来た最初の外人歯科医ではありませんが、近代歯科学を輸入した代表的な人というわけではないんです。日本の近代歯科学の基礎を築いてくれた恩人としてはユリオットとパーキンスとを私はあげたいと思います。この二人の外人歯科医の弟子が、日本の歯科の基礎をこしらえたからです。

もう一つ言いたいのは、高山記者は、当時としてはみのがせない偉い人で、教育者としての業績は立派なものです。入歯の技術はあんまり達人じゃなかった。渡辺良吉や、小幡英之助には及ばなかったのです。

原 あんたは、高山さんにおめにかかったのですか。

今田 晩年の高山先生に逢つております。ほんとうに歯科の学問や技術を輸入して紹介した人に、入沢達吉先生と医科大学で同期だった伊沢信平さんも忘れてはいけない人です。伊沢信平は医学部二年までいって三年め

必要な準備をする、いわゆる講習会ができはじめたのですが、これも、ずつと四、五年あつたからです。そして多くの人は、いわゆる開業歯科医の所に弟子入りしまして、そこで先生のやることを見聞きして技術を覚えた。理論は歯学のような状態だったんです。そこで、高山先生が二十三年に高山歯科医学院、これは実質は講習会と変わらないのですが、一応、学校のようなものを作ったわけなんです。そのあとを血闘先生が受け継いで、東京歯科医学院と名前を変えて経営したわけです。これが現在の東京歯科大学になるわけです。

一ぼりの中原先生は、やはり、最初は、講習会を共同で作ったのですが、そのうちに、自分が一人で経営することになり、日本歯科医学院を作った。これが現在の日本歯科大学になっているわけです。

そして、どちらも明治四十三年ですか歯科医学専門学校の指定を受けて、それ以後は無試験で開業ができるというふうになったわけなんです。

原 実際問題としてやはり、血闘守之助、中原市五郎という人は、日本の歯科教育には忘れられない人ですね。

山田 絶対的なものです。それは、政府が
歯科のほうは積極的に努力してくれない。歯
科医がやむをえず、自分の自営というふう
にやっていた。そういう、つまり、習慣が大正の
頃まで続いてきたわけです。ですから、歯科
医の法ができましたが、そういう面の改正
も、全部歯科医のほうでテンヤワンヤ言っ
てやっつけてもらったというような恰好なん
です。

内田 昔の私学というのは、人と人とのつ
ながりが非常に緊密だったんですね。

原 こういう話は興味深いですねえ。ぼく
は、歴史をしっかりとしないと学問は成立しな
いと思う。

今田 それはたいへん有難いことをお話し
やっていた。ほんとうにそうです。

本間 高山歯科学院ができたでしょう。そ
れが明治二十年代のわけですね。それから二
〇年経つと、それが専門学校になるわけだ
よ。それから二〇年経つと今度は、日本にはじ
めての国立の高等歯科学校ができるわけだ
よ。それから二〇年経つと今度は、大学がで
きるわけですね。

原 高等歯科学校から国立……歯科は私
立からできたんですね。

科課程でも、いざ、専門課程になりますと、
補綴学のしめる時間数、範圍というものが非
常に拡大になりますので、必然的に、昔たど
ってきたような経過を現在もたどりつつある
わけです。

ただ、そこで、近代歯科学という話が本間
先生のほうから出ましたけれども、やはり一
般はじめの口の中をいじる形は、入歯師と
口中匠があったのと同じように、本来は、
補綴は同じであったと思うんです。

ただ、やる仕事の内容が、非常に特殊であ
るという関係で、現在でも歯科学という補
綴学がまず頭に浮かびます。細って口腔外科
という口腔病ないしその診断という面が強
く出てきますので、医学畑から眺めますと
口腔科や口腔外科という形がちょうどよいと
いう考え方が多いようです。

したがって現在、医科大学の中で歯科は口
腔外科と言っておりますが、これははっきり
言いますと、口腔科というより口腔外科とい
っております。あるいは、医学の中の眼
科や耳鼻科と同じような扱いになっていたか
も知れません。しかし、補綴を強調しすぎた
のかどうか分りませんが、医学と歯学とは現
状でははっきり分れておりますし、従って、

今田 あの年代に、ドイツの医学と、ドイ
ツの医学の中の歯学ですね。口腔外科学とい
うものが輸入されたのは、東大の石原久先生
が先ですけれども、石原先生は技術をもって
こられたけれども、ちっとも門下を積極的に
指導されなかった。だけれども、教育に主眼
をおかれた。これは確かに理論的にもドイツ
流の口腔外科学というものを輸入された功績
というものは大きいです。

内田 そうです。先般、原教授のお話し
つたように、歯学というのは私学から始まっ
て、明治三十六年にはじめて国立にできたわ
けですね。東大医学部に医科歯科大学ができ
たのは、昭和三年ですか、創立は。

今田 歯学を完成させたのは、それは確か
に官立の歯科大学ですが、そこに至る水準を
築いたのはそれは東京と日本の二つの歯科大
学です。

原 医科歯科大学の学長だった島峯、長
尾、両先生のことを語って下さい。

今田 島峯先生が在職八年の研究を終え、
本間各地の大学を見学して大正三年十二月に
帰朝、文部省歯科病院から東京高等歯科医
校を設立されるまで、大変な苦心があったわ
けだが、それを補佐されたのは長尾先生で

医学の中では歯科は口腔外科と標榜していま
す。形の上でも体裁上でも、体質的にそうい
う気がいたします。学制が大きく関係してい
ますね。

言の美

原 歯科というのは、非常に顔の美に関す
ると思うんですね。歯列矯正とか、この頃は
整形的にも、ずいぶん女優たちが歯なんかを
なおしているんですが、そういうことで、一
般若いから、本間さんかな、歯の美という
ことで話して下さい。

本間 歯の美という、私、内田先生にも
ちょっとお尋ねしたいのは、原先生が、歯の美
ということを言われましたが、歯列矯正とい
うものが今、非常に盛んになってきたわけだ
よ。特に戦前よりも、戦後アメリカのそうい
うものが深く入ってきたんですが、あれは
——歯列矯正というのは形骸的に歯並びを
なおすということでしょうか。

機能の面とどのように結びつけるかという
ことは、まず、臨床の先生に一つお尋ねした
いんですが、結びつけたということをやっ
てるかどうか。あるいは、やるにはどうしたら
いいかということがあると思うんです。形骸

すね。金森虎男、槍田麟三、川上政雄先生も
忘れてはならない人ですが故人になられた。
島峯先生が日本へ帰ってこられたときに
は、東大の講師でしたが、教授の石原久先生
と仲が悪かった。教室で対立していたことが
結果的には官立歯科医学校の誕生につながる
といえましょうね。

原 あそこでは何とんでも硬質素理、む
しろ、歯科解剖に関係しますが、岡田正弘教
授の研究はすばらしいです。

歯科と口腔外科

原 内田さんは、歯科と言わずに口腔外科
と言われますが、歯科、口腔外科というよう
な考え方の推移はどのようなことですか。

内田 まず内科と歯科のちがいがから申し上
げます。先般山田先生がおっしゃいましたよ
うに、歯科の起源が、欠損部を補填するとい
うことから始って、どうしても、技術的な面
を強調しなければならぬという立場から出
発したように伺っているんですが、現実はこの
医学と歯学の教科内容その他を比べてみま
すと、歯学では、なんとしても補綴学の占める
比率が多いわけなんです。

したがって、進学課程では、ほぼ同様な教
学的になるほどいいという時点になったとき
に、機能的にはしかし、前よりは機能的によ
り秀れているかどうか。そういう考えはどう
ですか。

内田 矯正は私、専門ではありませんが……
；広義の口腔機能はその形態とやらはらの関
係にあると思います。形態的に正常(自然)
に近づける事は、機能も当然それに追隨しま
すし、特に、咬合機能についてははっきりそ
う言えます。

現在の矯正学では、形態と機能とは全く表
裏一体で同列に扱い、考えられていると思
います。口腔外科手術でも全く同じですから。

本間 なるほど。歯は「明瞭歯」と言わ
れるように、美的な点からも非常に大切なも
のだと思うんですね。顔との大きさのバラ
ンス、あるいは色合い、いろいろなものがある
と思うんですけれども、私、ほんとうの美と
いう……だから、今、形態学的になおした
からといって、機能的にいいかどうかとい
うことは非常に疑問だったわけですが。

原 自身が実は内田教授にごやっかいに
なっているんですが、この歯がなければ今夜だ
ってこんなに話せない。入歯というものは非
常に大事だと思うんです。

内田 はじめ、山田先生からお話があったように、歯科が入歯から始まったというお話がありましたけれども、私は、技術面ばかりじゃなくて、やっぱり、人間の歯を治療するという点で、心理的な、精神的な面を強調する治療法というのが現在、日本で



小学歯科読本

文部省に学校衛生課がおかれたのは明治三十三年(一九〇〇年)であるが、学校医に歯科医も加えようというのは中野市五島の勲校によって、明治三十四年に東京麹町区の小学校に衛生医の置かれたのははじまりである。この小学歯科読本は児童のために編まれたもので、手塚岸南(自由ヶ丘学園)と高津式(日本口腔衛生主義)の共著によるもので、昭和七年の発行である。(解説 本橋邦則)

ずいぶんあちこちで盛んになってきております。

そういう意味で、分化を続けておりながら一方で一般医学とだんだん似たような歩みになってくるのではないかと気がするんです。

今田 昔、山口秀雄教授が歯科芸術論を唱えて臨義歯学では、そうとうな話題を提供しましたけれども、やっぱり、死ぬまで山口教授は入歯の芸術論を主張していましたね。

内田 私も補綴の時間にそういう芸術論を伺いました。

今田 それはたしかに、義歯は入れて機能を回復しなければいけないが、見てやっぱり、美でなければいけないからね。

内田 なるほど、確かに、一般の方にすぐ具合のいい、悪いが解りますから。……その点、私もはそうとう神経を使わなければならぬです。

それから今、矯正学ないし、歯と美という話がありましたね。やっぱり形だけじゃなくして現在の矯正歯科学にしても、口腔外科学にしても、形態と機能、両者を追ってしっかりやっていると、昔は、一時代は確かに形だけ、それだけを追っていたと思うん

ですが、現在はすでに時代が違っておりまして、きわめて科学的な手術の方法であるとか、技術面でもいろいろな方向に、美に対する追求を積極的に行なっていて、しかもそれに応えるような手術法がとられております。

原 美に対する追求——まことにいい言葉だなあ。

内田 たが形だけを修復するんだったら、どなたでもできるんじゃないけれども、形と機能、両者兼ね備えた(至)治療法こそわれわれ臨床医の日頃の考え方であらねばならぬというのが基本的にあります。

原 非常にいい考えだ。

今田 さっき、歯科芸術という問題が出ていましたね。これは、矯正ではアポロニアの顔——標準的な顔だといって、私が矯正を習った頃はアポロニアの顔を模本美彦先生がきれいに描いて講義されました。そして口の中はなにを標準にしたかという、天然——自然ですね。もとの自然の解剖学的な自然の、それに復元するのが、今までの目標ではなかったのですか。

おそらく、顔貌の模倣にしてもこの施術にしても、もとの自然に復元するというのが大体の目標じゃないですか。

原 愛の最高の表現はまあ、キッス、という……。べーぜ、だから口が口ですよ。口と歯がきれいでないと、女というのは、ほくは魅力がない。(笑声)

内田 そのとおりでしょうね。

原 それが今夜の座談会の……

内田 中心になりましたね。

歯みがきの歴史

原 それから、私は「歯みがき」ということが、歯科に非常に大事だと思っております。歯みがきの歴史、ちょっと面白いと思うんです。

山田 これは文献上から言って、日本で商品として歯みがき粉ができたのは寛永二十年ですから非常に古いんです。それから、元禄の時代、いわゆるおしやれの時代に六種類ばかりでした。だんだん歯みがき粉というものが一種の流行になって、文政の頃には八〇種類くらいできたのです。

それで、この原料は磨き砂です。それに唐辛子、薄荷を加えて紅で色をつける。この紅で色をつけるということが、非常に大衆にウケたらしいんです。歯みがき粉でみがきながら、紅の色のツバをはくということが一つの

見栄のようなどころまでいったわけなんです。

思製の歯みがき粉が、明治になりました、化学的な処方方の歯みがき粉ができた。これを最初作ったのが、明治五年です。そうやって、だんだん西洋式の処方による歯みがき——主として炭酸カルシウム、マグネシウムですが、そういうものが一般の歯みがき粉の主成分になって化粧品屋から数多く売られるようになった。

そのうちに粉でなしに練り歯みがきができたのはじめた。しかし値段が高いために、一般に使われないで、粉歯みがきが使われて、それで今度の太平洋戦争の後になって、粉歯みがきがなくなったという状態なんです。

内田 歯みがきの歴史といっても、ずいぶんいろいろ、多彩なもんですね。

歯科の今後の問題

原 歯科というのは、入歯から始まったんで、理論より技術でしょう。技工士というのは非常に大事だと思う。そして歯科は一面美容科ですよ。眼と口と歯が美しくなけりゃあ、美人じゃないですよ。

内田 歯学でも医学でもそうですが、今後

ますます分科傾向になりますでしょう。やはり、ある時点では統合ということがありませんと。

本間 内田先生にお尋ねしますけれども、原先生が歯科の面では技工の分野が非常に大切で重要な位置を占めるということをおっしゃったけれども、歯科の臨床の面と基礎医学の面ですね。

基礎歯学と言ってもいいと思いますが、そのつながりがですね。例えば、解剖があり、生理があり、生理があり、いろいろあるわけです。今までの教室の行き方というのは、どちらかといえば、医科大学の真似をするという面が多いわけですね。

そういう面において、歯科大学も終戦後からすでに成人式を追って、結構適合期の年頃になっちゃったわけですね。こうなったら、歯科の面において、より独立した基礎歯学というものがあっても、私はいんじやないかと思うんですね。

内田 そうです。今の話、まことにそのとおりで、私は歯科独特の、臨床を支える、あるいは歯学を支える基礎医学があるべきだと思っております。

独特のものがあります、現実的に。例えば

「法術学」なんかもそうでしょう、それから、臨床を支える基礎医学という立場からしますと、これからは臨床何々学、臨床薬理学、臨床生理学などという、そういう学問が発展し、医学界に大きく貢献するというような気がするんです。

本間 歯科に解剖学とか、あるいは生理学ですね。そういった基礎医学が開業試験に加えられたのは、やはり、明治の初めですか。

山田 明治七年にできました医制のときからです。産科、眼科、口内科はその一科だけで開業できたんですが、そのときから局部の病理、生理、解剖を課した。

今田 それは確かにヨーロッパのものを見てもアメリカだって解剖だとか生理の基礎がないはずはない。全部それは、一般医学部の基礎だから、これと臨床とつながらないと言ったって、それはつながらないんじゃない、つながってるんじゃない、それを忘れているんだ。臨床には、それはいらぬと。それはとんでもない話なんだ。やっぱり、それは一つの一環の中に入ってる。当然、基礎の上立っているわけですね。

内田 臨床を支えるものは基礎医学だと思うんです。基礎医学の裏付けがないと、臨床

ら表があるのじゃないですか。鈴木勝さんはいいコレクションを持っているときいていますが、名を出すと出るのは清水静雄くんだね。ちよつと頑固だけれども、福島万寿雄くん。ぼくは、血腸守之助さんという人をもろすこし聞きたかった。血腸さんという人は、なんとなく歴史的に魅力があるんだが、内田 野口英世さんと血腸先生との関係はどうなんですか。

今田 野口さんは、高山科学学校の支那番だったんですね。そのうち医術試験をとって、それで東京歯科大学などの講師をやった。アメリカへ行くときなど、面白い話題をのこし血腸先生のカネで渡航したということ、血腸先生は野口さんにとっては大恩人ですよね。血腸さんから小遣いを出してもらって医者になり、旅費を出してもらってそれでアメリカへ行っただけなんです。横浜まで行って、あそこで女郎買いやつてね、また血腸さんの所へ戻って渡航費をもらっていったんですから。

原 野口さんは、うそばっかし言われるが……それが人間の姿だ、その上での大きい学者だったでしょう。

今田 中原さんは、ヨーロッパで水い開論

というものは非常に強いですね。

原 その前には歴史学がある。人間の基礎は、基礎医学以上のものです。

今田 私も、歴史は確かに、その医学の基礎のその前なんだと言いたい。

内田 生理学、解剖学、薬理学、病理学、全部口腔外科学には関係しておるんで、きわめてゆるがせにできないんですね。

今田 まだそこまで発達してないというか、伸びてないですよ、つながりがね。

内田 臨床の実際には当って疑問点がいっぱいありますがね。しかし、現実には相当程度フィードバックして発展していることは事実ですよ。

今田 解剖だって、系統解剖しか我々習ってなかったけれど、この頃の局部解剖はものすごいもんです。外科に行けば、外科の局部解剖があり、内科に行けば内科の局部解剖があるというくらいです。

内田 実地臨床で、いろんな疑問点が出ます。それに対して基礎医学の協力や裏付けを必要とします。臨床医学がそれに乗せて進歩していくという考え方は、いつも堅持しているつもりですが、私ども。

今田 近代の補綴学の進歩発達というの

を勉強されたのだから本物の芸術家だ。山崎清さんもそれに近い人ですよ。

原 歯科の人というのは、夜がないからなあ。

本間 高山紀香も日本画が、なかなか巧みだったんですね。

原 みなさんの、ご自分の趣味芸術を語っているけれども、内田さんは、非常に字が上手です。皆さんは何か……

本間 私は絵を描くんです。私、小学校のときからずっと絵を描いている。

今田 趣味というのはいないんです。趣味といえは、本を読んだり、物をあさったり、それは主として歴史的な……

原 コレクションしたくもカネがない。しかし医術出版の会長ですね、ここはあるな。医事新報の梅沢彦太郎さんがね、立派な人だし、コレクションはたいしたものだ。あんなはできるって……やんなさいと言ったでしょう。

今田 梅沢彦太郎さんは私と同じ年に出版を始めただが……

内田 山田先生は、さっきのお話、立派なご趣味じゃないですか。趣味というか、学問というか、たいしたものですよ。

は、解剖と生理じゃないですか。

文化人が多い歯科

原 最後になりましたが、歯科には文化人が多くいますね。歯科における歴史と文化に興味をもっているのは、瀬戸俊一さん、正木正さん、河越進さん、谷津三雄さん、高木圭二郎さん、新藤恵久さん、それ以外にどんな人……ひとつ「医家芸術」に協力をお願いしたいんだけれども。

本間 あとは、日本歯科の広木さんがいますね。それと櫻さん。

原 日本歯科というのは、ぼくは論文なんか見るとそれだけでも、真泉平治くんというのは立派だ。歯科の薬理学で抜群だ。それと日本医大の田村豊幸君。

今田 大体、日本歯科の今の学長の中原実さん自身が絵を描かれるし技師ですよ……

原 その絵はたいしたものだ。名会長でワシマン学長だが、妻さんの絵というのは天才的ですよ。今月号の表紙にお願いました。

今田 同じことでもう一人、山崎清さん。原 あの方は文化人。他に日本歯科というとなくなった豊田実くん。大阪歯大の白敷美輝嬢さんなんか、ものわりのいい人ですか

山田 若い時は資料を集めるのが趣味でした。

原 歴史がコレクションなんだ。

山田 それは、歴史は資料がなければだめですからね、今は好色本の研究です。

今田 われわれの史学研究はコレクションから始まるんです。私の場合には山田君や山崎先生への感化を受けて、だんだんコレクションに誘惑されちゃった……

内田 私、先生方のお話を聞いていて、やっぱり、それは何かに記述に残しておく必要があると思っんです。

今田 それはね、同志で研究会を作ったんだん実現しているわけですがね。

原 非常にいいお話を伺ってありがとうございます。私は、歴史というのには経営のこまばかりに熱中せずに余裕をもって、患者の身になってやる医者をつくらうじゃないか。それは、歴史と文化を知らない事業家的人にはできないことです。歯科の方に、日本医家芸術クラブに二層の愛情と関心をよせていただきたいと思います。医家芸術のためにぜひご活躍をおねがいいたします。

